

中学卒業後の不登校の子どもたちのための進路情報

表内の各学校等の詳細については、下のページに掲載しています。

主として出席が前提となっている学校等		主として出席を前提としていない学校等	
高等学校	全日制普通高校 ・公立高校（国立、工専を含む） ・私立高校 ・全寮制高校 定時制高校 ・公立高校（昼間通学・夜間通学） ・私立高校（昼間通学・夜間通学） ・チャレンジスクール（都立高校） 単位制高校 ・公立高校 ・私立高校 インターナショナルスクール （日本にある海外の学校）	高等学校	通信制高校 （広域校・狭域校、学年制・単位制） ・公立高校 ・私立高校 （関東圏外からの進出が目立つ）
専修学校 ・ 各種学校 ほか	高等専修学校 ・大学入学資格付与指定校 ・技能連携校 ・企業内学校 各種学校・無認可校 （英会話学校・ペットスクール等） 職業訓練校 技能を磨く （伝統的工芸職人などをめざす）	各種学校 ほか	技能連携校 サポート校 高卒程度認定試験予備校 （旧大検予備校） フリースクール
専修学校 ほか		留学 ほか	日本の学校が海外に設置する日本校 現地の高校 語学研修

そのほかの進路.....転入・編入 / 高校再受験 / 就職

最近の潮流

新しいタイプの定時制・通信制高校が増えてきた

2000年頃より、不登校や高校中退者など多様な生徒の学習意欲に対応することを目的とした新しいタイプの公立定時制・通信制高校の設置・再編が始まっている（例：都立桐ヶ丘高校などの通称「チャレンジスクール」）。この試みは全国各地で実施されはじめており、今後はさらに広がると予想される（[詳細は4ページの囲み内を参照](#)）。

教育特区により既成の枠にとられない先進的な学校も登場

教育特区とは、国の構造改革政策の一環として、学校教育法や学習指導要領にしばられず、先進的な取り組みをする学校や地域を国が支援するシステムのこと。

教育特区による新設校としては、不登校の小中学生を対象とした全国初の公立小中一貫校「八王子市立高尾山学園小学部・中学部」（2004年開校）が有名だが、最近では、ITを活用した在宅学習事業や、義務教育年齢を超えた不登校の子どもをサポートする教育の場として「広域通信制高校」が教育特区の認可を取得するなどして注目をあびている。

主として出席が前提となっている学校等

全日制普通高校

【公立高校】一時代前と比べると、出席日数不足などの理由で不合格にする公立高校はそれほど多くはなく、入試得点がそれなりに取れば受け入れる高校が増えてきています。

生徒自身や保護者が、志望動機や学校を休んでいた理由などを書いた「自己申告書」を提出すれば、調査書（内申書）の評定を合否の判断材料からはずし、「自己申告書」と当日の入試得点を合否判断の資料とするといった、不登校生徒に配慮した入試を実施している自治体もあります。ただし、一部の高校を除いて入学試験の成績重視型ですから、不登校によって学力不足におちいつている場合はハードルが高いかもしれません。

また、少子化傾向から、高校によっては定員に満たないところもあり、入学しやすくなっている反面、入学後のカウンセリングなどフォロー体制が整っていない学校もあり、入学したものの再び不登校になり、出席日数不足で留年や中途退学するケースもみられます。

【私立高校】私立高校でも、入試得点さえ取れば入学できる高校が多くなっていますが、入学後のサポート体制について考慮する必要があるでしょう。

さらに、私立高校には、不登校や高校中退者を受け入れている全寮制高校もあります。北星学園余市高校（北海道）、白根開善高校（群馬）、えびの高原国際高校（宮崎）などで、その多くは自然のなかでの体験学習を中心としたカリキュラムを組んでいます。親元を離れた共同生活が中心ですから、本人のしっかりした目的意識が大切になるでしょう。

定時制高校

定時制高校は、かつては働きながら学ぶ人たちのための夜間の学校というイメージでしたが、現在はかなり様相が変わってきました。働きながら定時制高校に通学している若者は、むしろ少数派になり、不登校を経験した生徒、全日制高校を中退し編入学した生徒、高校受験が思うようにいかなかった生徒など、もう一度やり直そうとする若者たちの学びの場になっています。

定時制のシステムの特徴は、特定の時間帯を学ぶ時間帯として選択できる点にあります。最近ではライフスタイルの変化に対応するために、昼間定時制高校の設立が増えています。

カリキュラムは、学ぶ時間帯以外はほぼ全日制高校と同じで、1クラスの生徒数も20～30人のところが多いようです。

時間や環境的な問題から、卒業率は全日制よりやや低率になっていますが、応募状況はゆるやかで、全日制高校より入学しやすいメリットがあります。ただし、昼間定時制高校の入試倍率は高くなる傾向にありますので、事前のチェックが必要です。

定時制高校の一例 **チャレンジスクール（都立高校）**

不登校や高校中退者などの多様な生徒の学習意欲に対応することを目的として、新たに設置された都立高校のことで、通称「チャレンジスクール」とよばれています。

部（午前） 部（午後） 部（夜間）の3部制で、生徒はこの3つのなかから好きな時間帯の授業が受けられる新しい形の定時制高校です。カリキュラムは普通科目と専門科目の両方を学習できるようになっており、卒業までに決められた単位を習得する「単位制」の総合学科であるため、学年の区別はなく、前期と後期の2学期制をとっています。

2000年度に都立桐ヶ丘高校、2001年度には都立世田谷泉高校が開校されました（下記の「首都圏 定時制・通信制の最新情報」もご参照ください）。

入試に際しては「志願申告書」を提出すればよく、調査書（内申書）の提出は必要ありません。選抜方法も学力検査は行わず、原則として作文と面接だけとなっています。ただし、最近の両校の応募状況をみると、桐ヶ丘高校も世田谷泉高校も、かなりの倍率になっていることが気になるところです。

こうしたチャレンジスクールに相当する試みは、全国各地で少しずつ実施されており、埼玉県では「パレットスクール」（下記の「首都圏 定時制・通信制の最新情報」を参照）が計画されています。

首都圏 定時制・通信制の最新情報

東京都 ...定時制、通信制の再編を加速させている

チャレンジスクール（3部制・単位制）

桐ヶ丘高校（2000年）、世田谷泉高校（2001年）に次いで、大江戸高校（2004年）、六本木高校（2005年）が開校。

新しいタイプの昼夜間定時制高校（3部制・単位制）

2005年スタートの一橋高校（千代田地区昼夜間定時制高校）では、併設される通信制課程との併修可。2007年までに、同様の昼夜間定時制高校が、台東、杉並、八王子の3地区に計4校開設される予定。

トライネットスクール

「インターネット」の活用と「他都立高校とのネットワーク」の活用を柱とする。

2005年には、昼夜・通信制併置の単位制高校として砂川高校がスタート。

埼玉県 ...「21世紀いきいきハイスクール推進計画」にもとづき、昼夜開講の単位制による定時制・通信制高校（通称パレットスクール）がスタート。

戸田翔陽高校（2005年）を皮切りに、2013年までに4校が開校される予定。

千葉県 ...「県立高校再編計画」にもとづき、通信制独立校、3部制定時制高校がスタート。

松戸南高校（2006年）、千葉大宮高校（2007年）など。

神奈川県 ...「県立高校改革推進計画」にもとづき、新しいタイプの高校づくりを推進。

フレキシブルスクール [単位制・全日制・定時制] 川崎高校、小田原高校（2004年）

[全日制・定時制・通信制] 厚木南高校（2005年）など。

単位制高校

1 学年、2 学年といった学年の区別がなく、卒業までに必要な単位を修得すれば卒業が認められる高校が「単位制高校」です。

必修科目以外は、自分の興味・関心に合わせて教科や科目を選択し学習することができ、時間割も自分で作るため、自分の都合に合わせた高校生活が送れる反面、しっかりとした自己管理が必要になってきます。

かつて高校中退者を積極的に受け入れることを目的として設立された都立新宿山吹高校は都立の単位制高校の先駆けですが、いまでは普通科進学校となり、当初の設立趣旨とはかけ離れた高校になっています。最近では、都立隅田川高校や都立飛鳥高校が単位制高校として設立されましたが、たとえば都立隅田川高校は、当初から「進学重視型単位制高校」を打ち出しており、不登校生徒にとって開かれた進路とはいえません。

単位制高校の場合は、教育方針などについても 1 校 1 校に特色がありますから、それぞれの違いについて、しっかりと把握しておく必要があるでしょう。

インターナショナルスクール（日本にある海外の学校）

インターナショナルスクールは、外国の大学・高校と連携して設立されているため、卒業しても日本の高校卒業資格は取得できませんが、海外へのホームステイや本校への留学システムなどもあり、卒業後は現地の大学への推薦入学制度がある学校もあります。

また、インターナショナルスクールを卒業すると、帰国子女枠で受験できる日本の大学も増えています。外国人生徒との交流から学ぶことも多く、日本の教育制度に合わないという人には、ひとつの選択肢となるでしょう。

インターナショナルスクールに入学することで、国内にいながら異文化体験を味わうことができ、実践的な語学力を身につけながら、新しい自分を探す機会になるかもしれません。

高等専修学校

専修学校には、中学校卒業者を対象とした高等課程（高等専修学校）高校卒業者を対象とした専門課程（専門学校）そして、これ以外の教育を行う一般課程の 3 つがあります。いずれも職業や実生活に役立つ教育を基本として、柔軟な制度の特徴を生かし、特色のある教育を実践しています。

個性重視の教育が求められるなかで、高等専修学校は、教育、保健医療、社会福祉、商業実務、服飾・家政など多岐にわたる教育を行っています。また、高等専修学校には、不登校経験者や高校中退者を積極的に受け入れている学校もあります。将来の進路がはっきりと決まっている人や特定の専門分野の勉強をしたい人にはふさわしい進路といえるでしょう。

さらに、高等専修学校のなかには「大学入学資格付与指定校」になっている学校もあります。大学入学資格付与指定校の卒業者は、高校卒業者と同等以上の学力があると認められ、自動的に大学入学資格が与えられて、大学や短大を受験することができます。

高等専修学校における技能連携制度

高等専修学校、あるいは企業内の職業訓練校などで、技術や技能を習得するための教育を受けながら、定時制高校や通信制高校で学んでいる人がいます。この場合、専修学校や職業訓練校で行っている技術・技能教育のなかには、専門高校で学ぶ水準以上の内容もあり、そうした学校で学んだ内容を高校の単位として認定し、学習の重複を解消しようとする制度が技能連携制度です。

専修学校や職業訓練校での学習が高校の単位として認定されるためには、それらの学校が教育委員会に指定技能教育施設として認可されていることが必要です。この指定技能教育施設を一般的に「技能連携校」とよんでいます。

主として出席を前提としていない学校等

通信制高校

通信制高校では、自宅で教科書や補助教材を使って学習し、教科書の決められた範囲についてレポートを作成（添削指導）し、毎週学校に提出することが学習の中心となりますが、定期的（月2回程度）に高校で行われるスクーリング（科目ごとの授業）にも出席する必要があります。

通信制高校には、公立・私立、広域校・狭域校、学年制・単位制とさまざまなタイプがあり、それぞれ独自の特色をもっていますので、自分に合ったシステムの学校を探すとよいでしょう。また、特別活動に参加することによって単位を修得できるなど、通信制ならではのメリットもあります。

入学に関しては面接のみで、ペーパーテストがないため、希望すればほとんど入学できることから、不登校生徒や転入・編入の生徒も多く在籍し、2005年度の在籍者は、通信制高校174校で17万8,745人にものぼっています。

自由な時間が多く、自分のスタイルを曲げずにマイペースで学習できるため、不登校を経験して、同年代の人と一緒に学ぶことに抵抗を感じている人、友だちづきあいが苦手な人、毎日登校することに自信のない人などには適しています。

しかし、その一方で、自学自習の生活が基本になるため、定期的なレポート提出に向けた計画性・継続性のある学習スタイルや自己管理能力が大切になってきます。他人の眼がないだけに、規律ある生活に慣れていない人の場合は、入学後すぐにやめてしまうことも少なくありません。

技能連携校

ここでいう技能連携校とは、先に高等専修学校の技能連携制度の項（7ページ参照）で述べた指定技能教育施設としての職業訓練校や専修学校のことではなく、通信制高校と連携して、技能連携校と通信制高校を同時に卒業できる学校（専修学校ではない）のことです。

技能連携校に入学した生徒は、同時に通信制高校にも入学することになりますが、技能連携校で学ぶ職業的な技能連携科目は、そのまま通信制高校の単位として認定されますから、あらためて通信制高校で学ぶ必要はありません。また、その他の専門科目・教養科目の学習や通信制高校のレポート提出を中心とした普通科目の学習についても技能連携校が

サポートしています。通信制のスクーリングについても、実際には技能連携校で行われることが多いようです。技能連携校は、専門知識を学びながら高卒資格もほしい人に適した学校といえます。

サポート校

通信制高校は、自分のペースで学べる自由さがある反面、計画的・継続的に学習を進める自己管理が必要ですが、ひとりでコツコツと勉強するのは意外にむずかしいものです。そこで約10年前に、新しい教育システムとして登場したのがサポート校です。

サポート校とは、一般に「通信制高校に通学する生徒のために、学習面では高校のカリキュラムに合わせて単位取得のためのレポート作成の指導をし、生活面の指導も行い、通信制高校卒業のためのサポートをする学びの場」といわれています。

の技能連携校と同様、サポート校に入学した生徒は、同時にそのサポート校と協力関係にある通信制高校にも入学します。ただし、授業や行事、友だちとの交流など高校生活の主体となる場合はサポート校ですから、生徒たちは「本籍は通信制高校、現住所はサポート校」にあると考えればわかりやすいかもしれません。

現在、サポート校は全国で約180校、在籍者は1万人にものぼり、不登校生や高校中退者をはじめ、従来の学校システムになじめず新しい生き方を模索したい生徒などが多数学んでいます。学校により、教育方針・環境、規模、カリキュラムなどもさまざまですから、学校見学に行くなどして実際に自分の目で確かめることが大切です。

参考までにサポート校の特色について、いくつかあげてみましょう。

- ・ 午前9時半始業など、登校時間をゆるやかに設定し、不登校を経験した生徒が通いやすい環境を整えている。また、少人数制・習熟度別クラス編成により、基礎学力をつけたい、苦手科目を克服したいなど、個々のニーズに対応した学習システムになっている。
- ・ 予備校や進学塾を母体としたサポート校も多く、そのノウハウを生かした、きめこまかな進学指導や進学情報の提供により、かなりの大学進学実績を残している学校もある。
- ・ マンガやアニメ、声優、コンピュータ、音楽、福祉など、不登校の生徒が親しみやすく、個性的なテーマをコースとして設定し、楽しく学びながら新しい自分を発見したり、自信を取り戻すことによって、次のステップへの推進力となる授業を展開している。
- ・ 必修科目以外に、ボランティアや国際交流、演劇、英会話など多様な選択課目を設け、また、体育祭や文化祭などの行事も充実させ、幅広い興味関心に応える配慮がされている。
- ・ 不登校経験者が多く入学してくることから、おおむねカウンセリング体制は充実しており、担任による家庭訪問も積極的に行われている。

高卒程度認定試験予備校（旧大検予備校）

不登校等の理由で「高校を卒業していない」あるいは「高校に入学しないで他の進路をめざしたい」という生徒のために、「高校卒業と同等以上の学力があることを認定するための国による検定試験」が、高等学校卒業程度認定試験（高卒程度認定試験／旧大検）です。

この試験に合格することを目的として、大学入試のレベルまで学力アップをはかる予備校が高卒程度認定試験予備校です。

高卒程度認定試験では、指定の8科目（「公民」で「倫理および政治・経済」を選択した場合は9科目）のすべてに合格すると、大学や専門学校などの受験資格が認められ、各種国家試験の受験でも高卒者と同等の扱いを受けます。

高卒程度認定試験は、年2回実施されます。1回で全教科に合格しなくても、1回目に合格した科目の試験は、2回目の試験では免除されますから、2回目のチャレンジでは、1回目に不合格だった科目だけを受ければよいことになっています。

ちなみに、2004年度の高卒程度認定試験の出願者数は2万4,960人にものぼっています。

フリースクール

フリースクールとは、不登校の生徒を対象とした民間の教育機関です。

文字どおり「自由な学校」ですから、施設の規模や教育環境、設備、指導内容などもさまざまですが、普通の学校と比べると小規模なところが多く、公的な援助も受けずに、主宰者のボランティア精神にのみ支えられて成り立っているスクールもあります。

しかし、いかにも学校然とした教育機関よりも、フリースクールのような家庭的な雰囲気の方が、のびのびできたり、通いやすいと感じる子どもも多いので、実際に施設を見学するなどして、その子に合った場所かどうかを検討するとよいでしょう。

なお、学校を休んでいる義務教育期間の子どもがフリースクールに通った日数は、在籍校の校長の判断によって、出席日数として認められることになっています。

フリースクールのネットワーク化をはかるための団体「日本フリースクール協会」では、電話無料相談なども行っています。

日本フリースクール協会 本部・事務局 03-3365-7390

～ 留学

海外には、文部科学大臣が日本の高校と同じ教育課程をもっていると認め、「在外教育施

設」と認定している高校（インターナショナルハイスクール）があります。

この「在外教育施設」の認定を受けた高校を卒業すれば、日本国内の高校卒業者と同等の資格が与えられます。あるいは、仲介団体を通じて、現地の公立高校や私立高校に留学することもできます。

留学の行き先で多いのは、やはり、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドといった英語圏です。留学先では、なによりも言葉の壁をクリアすることが重要になりますが、語学学習については、まず現地の語学学校で現地語を学んでから高校などに入学するケースと、現地語集中コースと一般の教科を並行して受講するケースがあるようです。

海外への留学は、今までしばられてきた世間の眼から解放され、誰も知らない新しい環境のなかで新規まき直しをはかりたい人には適しているといえるでしょう。異文化体験を通して視野が広がり、人間的に大きく成長するケースもあります。

言葉も文化も違う国での生活は、人によってはかなりのストレスとなることを覚悟しなければなりません。しかし、家族や同級生から離れることで、不登校という負いめがやわらいだり、日本とは違った価値観があることを身をもって学んだり、欧米の個性を尊重する教育が受けられるなどのメリットも見逃せません。言葉や生活習慣の違いを少しずつクリアすることによって、自分に対する大きな自信を身につけることも可能でしょう。